討を加えた。特に麻酔剤，麻酔法と術後の肝機能との間には相関はみられなかった。

21. Chemical burn の救急処置

内田隆治（東邦大）

症例は3才男児で，pH 13の工業用廃液槽内に転落，5分後に救助され，高度の薬傷等心停止寸前の状態であった。一連の C. P. R. 施行後，当該液流入による，重篤な肺合併症発生を憂慮，気切下にレスピレーターに接続 Critical care の結果，不可能と思われた視力回復，気切孔閉鎖し，第47病日全治退院せしめた。以上の経験を通し，"Chemical burn" の救急処置について検討，反省したので，多少の文献的考察を加えて報告した。

22. 悪性高熱症

馬場英昭（東邦大）

GOF 麻酔下に，Stein Leventhal 症候群のうたがいで，腹腔鏡，卵巣切除施行中，悪性高熱症を発症した1例を経験した。

最高体温43.2°C，又その上昇の度合は10分間に5.6°Cにおよんだ。ミオグロビン尿，CPK 高値，高K血症，LDH. GOT. GPT の異常高値を認めた。

本症の原因は，不明であるが，本例ではテストステロン高値が認められ，内分泌異常との関連をうたがわせた。

23. 呼吸管理における定濃度酸素投与装置の検討

宇津木誠（千大）
瀬戸屋健三（東京厚生年金）

今回試作された，ベンチェリー方式による，一定低濃度酸素投与装置について，酸素濃度，流量を実測し，実際の患者に使用可能なことが分かったので報告し，合わせて，その特徴を，他の酸素投与装置と，比較検討した。

24. 長期人工呼吸の予後不良例の検討

長谷川洋機，小林玲子，瀬戸屋健三
（東京厚生年金）

ICU において5年間に長期人工呼吸管理35例（9日以上，最長590日）を行い，その管理については既に他誌に報告した。35例中19例が死亡し，死因は敗血症及び腎不全が10例，脳死3例，気管大出血2例，気管狭窄2例，消化管出血1例，事故1例であった。これらの症例が長期人工呼吸管理のどの時期に死亡したか，我々が考えた呼吸プログラムにそって検討した。

25. 低体温麻酔中における R. R., V_T., M. V., $\dot{V}_{O_2}$., について

平賀一陽，宇津木誠，白幡真知子
（千大大）

脳動脈瘤クリッピング術に Ether 低体温麻酔（29°C前後）を施行し，その冷却過程加温過程の R. R.（呼吸数），V_T（1回換気量），M. V.（分時換気量），$\dot{V}_{O_2}$（酸素消費量）を測定し，血液・脳脊髄液酸塩基手術との関連について述べた。血中乳酸の上昇は低体温麻酔中における血流の不均等分布を示唆し，術中の補液には乳酸を用いないことと低血圧の時間はなるべく短くすることが望ましい。

26. 余剰ガス吸着装置の使用経験

伊東範行（千大）
野口照義（千大・手術部）

麻酔余剰ガスによる手術室内空気汚染の為に，手術室勤務者の健康が，害されていると，されている。麻酔26(2) に発表した。余剰ガス排除弁に活性炭を併用し，活性炭前後の Halothane 濃度を測定し，活性炭の Halothane 吸着能について検討した。常用濃度の GOF 半閉鎖麻酔において，130g の活性炭は，3時間まで，吸着可能であった。本装置を用い，3時間毎に，活性炭を交換すれば，大部分の余剰ガス排除が，可能であろう。